

朝鮮神宮競技大会の創設に関する考察

－その経緯を中心として－

金 誠 (流通科学大学 非常勤講師)

Abstract

The study of the foundation of the Chosen Shrine Athletic Meeting － With the focus on its process －

Sung KIM (University of Marketing and Distribution Sciences)

The focus of this study is to clarify the process of the foundation of the Chosen Shrine Athletic Meeting in Colonial Korea. The results of this study are as follows:

- 1) As the Chosen Shrine Athletic Meeting needed a large ground, the Keijo ground was built on the premises.
- 2) The Chosen Sports Association organized and administered the Chosen Shrine Athletic Meeting.
- 3) The Chosen Shrine symbolizing Shintoism in which the emperor was worshipped as a living god was founded as well. And its ground-breaking ceremony was held on a grand scale.
- 4) The opening ceremony of the Keijo ground and the ground-breaking ceremony of the Chosen Shrine were held at the same time, and the opening ceremony of the Chosen Shrine Athletic Meeting was held immediately after them. These ceremonies together strengthened the festive atmosphere.
- 5) That is the way the Chosen Shrine Athletic Meeting influenced by the Meiji Shrine Athletic Meeting was organized. Both the Japanese and Korean athletes and players participated in this Athletic Meeting together, and those who made excellent records proceeded to the Meiji Shrine Athletic Meeting held in Japan.

1. 研究の意図と着眼点

本研究は当時日本の植民地であった朝鮮において創設された朝鮮神宮競技大会に着目し、大会創設の経緯を明らかにしていこうとするものである。

朝鮮神宮競技大会は1925(大正14)年にはじめて開催されている。当時の朝鮮は日本の支配下にあり、朝鮮総督府の統治方針としては文化政治¹⁾と呼ばれる植民地政策が採られていた時期にあたる。このとき言われたスローガンは「内鮮融和」であり、日本人と朝鮮人の共存を建前とした政策が展開されていた。

こうしたなかで朝鮮神宮競技大会は創設されていく。これは朝鮮における初の総合的なスポーツ大会であった。また、この大会が開催される前年には日本で明治神宮競技大会が開催されており、この大会のひとつの見方として明治神宮競技大会が植民地まで拡大されたものともとれる。そのため明治神宮競技大会に付されていた意味との関連からも朝鮮神宮競技大会の創設に関して検討していく必要があるだろう。ただ、両大会の後の状況を照らし合わせてみて、必ずしも単に明治神宮競技大会が植民地へと拡大されただけとは捉えられず²⁾、朝鮮神宮の鎮座祭や京城運動場の開場式を

含む一連のイベントのなかで朝鮮神宮競技大会が成立していった点は見過ごせない。

ところで朝鮮神宮競技大会そのものに触れられている先行研究としては、『大韓體育會史』が挙げられる。ただこの『大韓體育會史』には大会が創設に至った第1回大会に関する明確な記述³⁾はなく、その内容も競技結果などに終始している。また李学来によって記述される朝鮮神宮競技大会⁴⁾は、民族主義的な立場から描かれ、こうしたスポーツ活動を日本人との対決というかたちで記述しているため、大会の創設ならびにその状況の詳細な分析には至っていない。

資料に関しては京城日報⁵⁾を中心に当時の新聞資料ならびに当時の雑誌などを用いて大会創設の経緯を明らかにし、大会創設に関しての考察を深めていきたい。

2. 大会開催への準備

大会を開催する準備・運営を担ったのは朝鮮体育協会である。そのため大会開催までの過程は朝鮮体育協会の動きから見て取ることができよう。また大会の開催に際して要求されたのが、大会を開催することのできる運動場の存在であった。朝鮮神宮競技大会は朝鮮において開催される初の総合的なスポーツ大会であったため、この大会が開催されるにあたってはそれに見合った「場」が必要とされたのである。その「場」として登場してきたのが京城運動場であった。以下では大会開催までにどのような準備がなされたのかを京城運動場の竣工と朝鮮体育協会の活動から見ていく。

(1) 京城運動場の竣工

京城運動場は光熙門と東大町との中間にあたる訓練院広場の東方公園地に22,700坪の総面積をもって建設され、工事費は155,000円を費やすというものであった⁶⁾。

この運動場建設の目的は「数年前より大京城として完全な一大運動場が欲しいと云ふ輿論が旺になり、大正十二年の春に府で大體の計画を樹てゝ

ゐるが、時恰も東宮殿下御結婚記念事業として何等かの計畫實現を必要とするに至ったので、京城府は永遠の記念として一大運動場を建設することに決定」⁷⁾したという経緯から理解されよう。当時の京城の運動施設といえば、学校の運動場に依存することがほとんどで、例えばテニスコートにしても一般に開放されるということがなかった。そのため施設の整った運動施設の建設が要求されたのである。また、この運動場の建設が東宮の結婚を祝した記念事業でもあった点は重要であろう。「東宮殿下には豫て體育方面に特に御熱心に御奨励あらせられ」⁸⁾ていたということが、この運動場建設を東宮の御結婚記念事業へと結びつけたようである。

京城運動場の建設がこうした記念事業としての意味をもったことにより、府を中心とした建設を行う側は強い責任感を持たざるを得なかった。当時その設計に携わった京城府の技師大森鶴吉は、この記念事業に万全を期すために日本の著名なグラウンドや運動場を視察し、さらに外国の運動場についても研究を重ね、体育協会の関係者とも意見を交換したうえで設計に取り掛かるという徹底ぶりだった⁹⁾。また運動場を建設する際に起きた土地の買収問題¹⁰⁾にあっては、土地収用令による強制処分も辞さないとしながらも、東宮の慶事を記念するグラウンドであるため、法の力を用いることに懸念の声があがるなど、ここでも何らかの影響が垣間見られたのである。

運動場建設が本格的に始まったのは1925（大正14）年5月の起工式を終えたあたりからである。起工式に至るまでは土地の買収問題や建設経費の問題など諸所の問題が浮上しており、建設事業は足踏み状態だったが、起工式後は朝鮮神宮競技大会が開催される10月に合わせて計画通りに運動場の竣工がなされていく。完成した京城運動場の設計状況をみると、総面積22,700坪中、陸上競技場8,500坪、野球場5,500坪、庭球場1,200坪、水上競技場（予定地）600坪、馬場550坪、植樹芝生地道路6,350坪となっている¹¹⁾。これらの設備の完成に際して大森は「其經費頗る少く僅

か十五萬餘圓では到底充分の設備は出来ないのである、現に明治神宮競技場の如き單に競技場丈けにて百餘萬圓を投じ又甲子園の如き野球場丈けにて八十萬圓を費やして居る、之れは主として觀覽席に多額を要したのであるが京城運動場は總額十五萬餘圓で各種の競技場を造ると云ふ無理があり到底觀覽席等は理想通りのものが出来る筈はない今日考えればこの少額で全體の現設備が出来た事が意想外とする所である然し規模としては將來を豫想し充分の設備をなし得る構造としてあるのは勿論であるが觀覽其他を完備するには少くも今後尚百餘萬圓の經費を要するのである。幸ひに現運動場が一般土木事業界の不況時にもあつた關係上經費の割合に相當の設備をなし得た事を了承されたいと思ふ」¹²⁾と述べている。少ない經費のわりに施設の充実をはかることができたのである。

ともあれこうして竣工された京城運動場は「愈々來たる十五日朝鮮神宮鎮座祭の記念すべき日に此記念事業として建設した運動場の開場式を挙げ十七、十八の兩日朝鮮神宮競技大會場として初めて使用し得るようになったのは色々の意味に於て非常に喜ばしいことである」¹³⁾とあるように、朝鮮神宮の鎮座祭、朝鮮神宮競技大会との関連性を意識したうえで開場式を迎えようとしていた。こうした総合的なスポーツ施設の登場が朝鮮神宮競技大会を成立させる必要条件であつたことは言うまでもなく、また、この運動場建設がひとつの記念事業としても遂行された点は看過できない。

(2) 朝鮮体育協会の活動

朝鮮神宮競技大会を主管したのは朝鮮体育協会であつた。朝鮮体育協会は朝鮮における体育・スポーツの普及發達を目的として1919（大正8）年2月に朝鮮新聞社の後援を受けつつ発足している。この体育協会は京城庭球団と京城野球協会を中心として組織されていたため、発足当初は「野球と庭球に力を注ぎ斯道の發達普及を圖る」¹⁴⁾ことをまず第一に掲げて、その活動を展開していたようである。

朝鮮体育協会の運営資金は会費と寄付金に基づ

く基金で成り立っていたが、寄付金の占める割合が大きく、主に総督府と民間企業に頼っていた。そのため総督府の政策次第では運営に多大な影響が及ぼされることとなり、朝鮮神宮競技大会が創設された年の1925（大正14）年には総督府の鉄道経営の移管問題から朝鮮体育協会の組織改造問題にまで発展することとなった¹⁵⁾。これは総督府がそれまで南満州鉄道株式会社に委託していた鉄道の経営を新鉄道局へ移管すると決定したことによるが、その移管は同年3月31日に施行されている¹⁶⁾。これにより総督府の予算は鉄道局に大きく流れることになり、朝鮮体育協会は運営上の資金不足の問題を抱え込むこととなる。

こうして運営の窮地に立たされた朝鮮体育協会では組織の改造問題が取沙汰されるようになった。4月には「改造を叫ばれてゐた朝鮮體育協會先月末役員會を開いて今年の豫算、事業計劃、役員改選、その他に關して協議した結果豫て本紙が報道した通り從來の組織を會員組織とし年額十二圓以上を納むるものを會員とすることになった」¹⁷⁾とあり、組織改造についての決定が下されている。朝鮮体育協会をこうした会員組織としたのは、多くの人々を会員とすることで会費を調達し、資金不足の解消を図ろうとしたことに他ならなかったが、このような結果を招いたのは朝鮮体育協会の有する半官半民の性格によるものであつたと理解されよう。こうした資金不足が影響して朝鮮体育協会はそれまで主管・主催していた各種スポーツ大会からは手を引き始め、朝鮮神宮競技大会を中心にスポーツ大会の主管・主催を行っていくこととなるのである。

ところで、朝鮮体育協会はこの第1回の朝鮮神宮競技大会の準備あたり、まず競技細目及び選手の出場資格を決定している¹⁸⁾。第1回大会において採用された種目は陸上競技、野球、庭球、バスケットボール、バレーボールの5種目であつたが、陸上競技を除く4種目についてはそれまでの競技成績を加味したうえで大会役員会の推薦により大会の出場者が決定されていた。陸上競技の出場資格に関しては「脚力を以て渡世している者即ち車

夫、配達夫等を除く一般學生、青年團員、女子學童に限る」¹⁹⁾と規定されており、車夫などのいわゆる脚力の強さを生業としている者の参加は認められなかった。

大会の経費に関しては、その見積もりを行ったうえで経費の不足の問題を指摘し、これに対応するため、同協会は会長の生田清三郎の名で齊藤総督宛に2,000円の補助金の下付願いを提出するという一面も見せている。これに対しては「本府でも同大会が神宮を壽ぐ最も好き方法であり、全鮮の體育及競技發達に資する事甚大なので是に諒解を與えてゐるので近く下附される模様である」²⁰⁾と、府側による大会の重要さの認識も相俟って、事なきを得ている。また、経費の不足のために貴重な収入となったのが大会の入場料であった。これは大会開催が差し迫った10月8日に最終的な打ち合わせが行われ、各競技3日共通券1円50銭、1日券70銭、学生3日券80銭、1日券40銭と決定されている²¹⁾。この金額は当時朝鮮の田舎で働く人夫1日の賃金が、男性の場合最高で1円から最低50銭であった²²⁾ことから推すと、決して安い金額ではなかったであろう。そのためか15日における京城運動場の開場式ならびに朝鮮神宮競技大会の開会式は一般民衆を多く集めるため無料で開放するというにはなっている。

朝鮮体育協会はこの他にも大会プログラムの作成を行うなど、朝鮮神宮競技大会の細部に至るまで、全面的にその運営・管理が委託されていた。こうして大会の開催に至るまで朝鮮体育協会によって大会の準備が着々と進められていったのである。

3. 大会創設の背景

朝鮮神宮競技大会の創設には当時の国家神道の影響が見られる。それはこの競技大会が朝鮮神宮を奉賛するという意味を含んでいたことから理解できよう。そのためこうした影響が大会の性格を規定するひとつの要素となっていたはずである。またこの朝鮮神宮競技大会は前年に創設された明治神宮競技大会の予選大会としても位置づけられ

ていたため、2つの大会の接点からも大会創設の背景を導き出しうるのではないかと考える。以下はこれらに着目し、大会創設の背景、また大会の性格について検討する。

(1) 朝鮮神宮の創建

朝鮮神宮の創建は日本による植民地朝鮮への宗教政策が具現化されたものとみることができる。これは日本の近代において国教化されるに至った国家神道の存在を抜きにしては語れない。ここで言う国家神道を村上は以下のように説明する²³⁾。「集團の祭祀として伝統をうけついできた神社神道を、皇室神道と結びつけ、皇室神道によって再構成し統一することによって成立した。民族宗教の集團的性格は、國家規模に拡大され、國民にたいしては、國家の指導理念である國体の教義への無条件の忠誠が要求された。國家神道の教義はそのまま國民精神であるとされた」

すなわち、既存の神社神道を天皇制イデオロギーに基づく皇室神道と結びつけることによってその存在意義を高め、國民の精神的な統合を促すものとして登場してきたものが当時の國家神道であったと理解される。

こうして成立してきた國家神道は伊勢神宮を頂点とする近代社格制度²⁴⁾に基づいてシステム化され、國家事業として推進されていく。

そして、この体制が植民地であった朝鮮にも拡大され、それを最もよく象徴するものとして朝鮮神宮が創建されるのである。創建についての内閣告示が出されたのは1919（大正8）年である。その内容をみると「朝鮮神社創立並其ノ社格 大正八年七月 内閣告示第十二號 一 朝鮮神社祭神 天照大神 明治天皇 右神社ヲ朝鮮京畿道京城府南山ニ創立シ社格ヲ官幣大社ニ列セラルル旨仰出サル」²⁵⁾となっており、内閣告示が出された当初はまだ「朝鮮神宮」という名称ではなく「朝鮮神社」であったことが分かる。「朝鮮神宮」へと名称の変更をしたのは1925（大正14）年6月に出された内閣告示のときであり、鎮座祭の行われる4ヶ月前のことであった²⁶⁾。

ところで朝鮮神宮は「朝鮮に於ける内鮮同胞を

して報本反始の誠を盡し精神生活の中樞を明徴にし、半島大衆の嚮ふ所を昭示し給はんとの大御心に基づく」²⁷⁾ものとされ、また総督府も「内鮮人の共に尊崇する事の出来る神祇を勧請して、半島住民の報本反始の誠を致させ、内鮮融和を圖るのは、朝鮮統治上最も緊要の事」²⁸⁾とし、朝鮮神宮の創立が内鮮融和を図るうえで重要な役割を果たすものと考えられていた。

また祭神に関しては天照大神ならびに明治天皇としているが、この祭神をめぐるのはひとつの論争が起きている。内閣の告示によって定められた祭神に対して、神道関係者が異議を唱えたことでこの論争は始まっている。このときに異議を唱えた小笠原省三の主張は以下の3点であった²⁹⁾。「一、祭神に朝鮮國土の神を奉祀せよ。二、社殿の様式を、朝鮮の風土に適したものとせよ。三、調度装束及祭式は、内鮮兩地の長を採りて新儀式を制定せよ。」ここで小笠原の言いたかったことは興味深い。すなわち、朝鮮人の内鮮融和を促すうえで、あるいは国家神道の普及のためには朝鮮における朝鮮人のための神社を創建する必要があると説いているのである。そのために祭神は朝鮮で古来から崇拝されている檀君³⁰⁾を祀り、朝鮮の気候風土に合わせた社殿を設け、朝鮮の文化も取り入れながらそれらを神道という枠のなかへと絡め取っていかうというものであった。

しかし、この主張は退けられる。その理由は「檀君は伝説的存在であること、天照大神、明治天皇と檀君とを合祀することは、かえって朝鮮民族に神宮輕視の念を抱かせる結果になる」³¹⁾とされている。つまり、ここでの論争から分かることは日本の側がこの神宮に対していかに天皇制イデオロギーを矜持していたのかということであった。それほどこの神宮に対する当局側の思い入れが強かったとも換言できる。

こうして朝鮮神宮は上記のような背景を持ちつつ創建され、1925（大正14）年の10月15日には、その鎮座祭が挙行される運びとなった。後述するが、この日は京城運動場の開場式、朝鮮神宮競技大会の開会式と同日であり、植民地朝鮮にあっ

て、この日は特別な一日であったと思われる。

(2) 明治神宮競技大会との関連性

朝鮮神宮競技大会の開催に先立つ1924（大正13）年、日本で明治神宮競技大会が開催されている。朝鮮神宮競技大会は明治神宮競技大会の予選大会としても位置づけられていたため、明治神宮競技大会開催の経緯、目的から朝鮮神宮競技大会に付された役割も推し量れよう。

1924（大正13）年の第1回明治神宮競技大会を主管したのは内務省だった。これは当時の神社行政が内務省の管轄であったことがひとつの要因だと考えられる。そのため明治神宮外苑造営には内務省内に設置された明治神宮造営局が担当し、明治神宮奉賛会と提携しつつ神宮外苑の設計及び施工がなされたのである。そして1924（大正13）年10月に競技場がまず第一に竣工され、同月に竣工式を挙行し、11月の明治神宮例祭を機として明治神宮競技大会が開催されている³²⁾。

また内務省はそうした神社行政に携わる一方で1916（大正5）年に保健衛生調査会を設置しており、労働者の増加にともなう衛生上の問題を解決することで労働力の確保を意図するようになる。そこで体育・スポーツを奨励し、体力の鍛錬を中心とした「国民保健事業の進展」を図ろうとしていた³³⁾ということもこの当時の内務省のもつ特徴のひとつであり、明治神宮競技大会を主管した理由として理解される。

では明治神宮競技大会開催の目的は如何なるものであったのだろうか。第1回の明治神宮競技大会報告書をみると以下のように記されている³⁴⁾。

「明治神宮外苑に築造中の大運動競技場は大正一三年十月を以て、其の工事竣成の筈なりしを以て、全國の選手を東京に集め、神前に光榮ある全國的一大競技を行ふは豈に明治大帝の御聖徳を敬仰する所以なるのみならず、國民の身體鍛鍊並精神の作興上其の効果尠少なからずと信じたるを以て、此の年を始めとし、毎年同神宮例祭を機とし、明治神宮競技大會開催の案を樹て、關係方面と打合協議を重ね、遂に同年八月之が根本計劃確

立し、経費としては保健衛生及奨励諸費中より金
 十萬円支出の件も略決定したるを以て、文部省、
 陸海軍省、地方長官等に對し、左記の通り配慮方
 を依頼せり」

上記のように明治神宮競技大会は明治神宮例祭
 とその時期をあわせて開催されることとなり、そ
 の目的は「明治大帝の御聖徳を景仰」し、また
 「國民の身體鍛鍊並精神の作興」に置くこととし
 ている。

こうした目的をもって開催されることになった
 明治神宮競技大会が植民地へとその規模を拡大し
 ていこうとしていたのは大会開催当初からみられ
 た。報告書の要項にある選手選出方法には「青年
 団ハ道府県単位（一府県十名程度）、一般女子ハ
 大体從來大日本体育協會カ地方予選ヲ行ヒシ区域
 ニ從ヒ、全国ヲ北海道、東北、関東、北陸、東海、
 近畿、中国、四国、九州、台湾、朝鮮及関東州
 （満州ヲ含ム）ノ十二区ニ別チ予選シ、参加資格
 ヲ定ムル見込」³⁵⁾とあり、大会開催の当初から台
 湾、朝鮮、満州などの植民地からも代表選手を招
 聘し、大会を形成していこうとしていたことが窺
 える。このような規定により、翌年には朝鮮にお
 いても朝鮮神宮競技大会が開催されたのであり、
 この大会が明治神宮競技大会と同様、天皇制イデ
 オロギーを体現していく機能を合わせ持つもので
 あったと理解されよう。

4. 大会の開催を含む祝祭的空間の形成

朝鮮神宮競技大会の開催はこの大会が単一で開
 催されたのではなく、朝鮮神宮の鎮座祭、京城運
 動場の開場式などとともに盛大に執り行われた。
 そのためこうした一連のイベントによって日本の
 権威を当時の朝鮮において示しえたことは間違
 いだろう。これは「内鮮融和」というスローガ
 ンに象徴されるように、当時の植民地政策を反映
 してもいた。以下ではこれらの様子をみていく。

(1) 朝鮮神宮鎮座祭の挙行

1925（大正 14）年 10 月、朝鮮神宮が創建され、

その鎮座祭が同年 10 月 15 日に催されることとな
 った。この鎮座祭は朝鮮全土をあげて祝う盛大なも
 のであった。例えば京城府は以下のような計画を
 もって奉祝に備えている³⁶⁾。

1. 神宮の表参道に大奉祝門を建てる
2. セブランス病院の前に大アーチを建てる
3. 南大門を電飾する
4. 御霊代安着の 13 日から 18 日まで夜には花火
 を打ち上げる
5. 各小學校生徒 25,000 人に旗行列を行わせる
6. 府から大鏡餅を供物として進呈する
7. 京城電気会社に交渉して花電車 20 台を運転
 させる
8. 各商店運送会社の貨物自動車に花飾りをつけ
 させる
9. 府内新聞社、大会社、大建物には電飾を依頼
 する
10. 平壤航空隊に依頼して府の上空で奉祝飛行を
 行わせる
11. 各地から集まる人々のために旅館主に安価で
 親切にするよう依頼する

こうした準備の他にも、鉄道局などでは多くの
 参拝者を見込んで臨時列車の増発ならびに参拝者
 には運賃の値下げを施す³⁷⁾などの措置をとってい
 る。また京城を訪れる人々のための宿泊場所に関
 しても府はいろいろと工夫しなければならず、そ
 れらの人々が旅館に宿泊しきれない場合は下宿屋
 にも宿泊させることとし、例えば小學校や普通学
 校生徒などの団体については府内の小學校や普通
 學校の講堂を臨時に宿泊所として利用、青年団な
 どには寺院を開放することにしていた³⁸⁾。

そして 15 日の当日を迎え、鎮座祭が挙行され
 る。この鎮座祭には朝鮮総督の斉藤実をはじめ、
 李王家からは李堦が王の名代として参列し、各国
 領事、各道知事、軍の将校、また新聞記者や銀行
 関係者、実業家など約 3,500 名にも上る人々が出
 席していた³⁹⁾。

鎮座祭は定められた式次第にしたがって約 2 時
 間にわたり厳かに執り行われ、「かくて李堦公殿
 下、總督、宮司、参列員の順序に退下したが、既

にこれを以て朝鮮の守護神は永遠に南山の中腹淨域に鎮座遊ばされた」⁴⁰⁾とされている。

一方、鎮座祭当日の府の様子をみると「京城府は驛に大奉迎門を建設し、各町々亦奉迎門を作り、各戸に國旗、獻燈、締飾を施し奉祝の至誠は全市に漲り、奉迎の慶は街街に満ちたが、殊に十五日祭典當日大學豫科學生以下各種學校生徒の參拜あり、二萬五千餘の初等學校生徒は手に々々小旗を翳して參拜し、夜は府主催の提灯行列があり、馬野府尹之を統率し、五百の職員を先頭に青年團及町洞等の參加者之につづき、約二千五百の大民衆が蜿蜒火龍のうねりを作り、左の奉祝歌を高唱しつつ參拜し拜殿前に萬歳を三唱したのである」⁴¹⁾とされ、この鎮座祭が盛大に行われ、またこれに多くの人々が導入されたことを窺わせる。

ところでこの鎮座祭に際して朝鮮総督の齊藤はこの神宮の意義を以下のように述べていた⁴²⁾。「惟ふに我國敬神の大義は國民道德の大本であつて、神社の崇敬は報本反始の精神の表現である。抑神社には行政上それぞれ社格の區別は存するも、皆齊しく其の祭神の神徳を景慕し、衆庶が各其の追遠報始の至情を發露すべき、齋場に供する國家の施設に外ならぬのである。故に國民として神社を崇敬し以て國家の奉祀する我國の祖先及功臣に對し、至誠の念を以て禮を致すことは固より當然のことと謂はねばならぬ。(中略)茲に聊か所懐を陳べ、將來半島に於ける民族が、相率ゐて神宮に對する崇敬の念を厚うし、以て其の歸嚮を一にせんことを切望してやまぬのである」

このように鎮座祭は朝鮮神宮の存在を朝鮮全土に知らしめることとなり、そのイデオロギーを最も象徴する出来事として舉行されたのである。

(2) 京城運動場開場式

1925(大正14)年10月15日は朝鮮神宮の鎮座祭の儀式が午前に行われ、続いて午後からは京城運動場の開場式が行われている。

開場式の様子は以下のように語られる⁴³⁾。「この記念すべき大運動場の開場式は朝鮮神宮御鎮座祭の佳日を以て陸上競技場に於て盛大に舉行され

た。定刻に先立ち小學校、普通學校、高等女學校等の兒童生徒、青年團員、朝鮮神宮競技出場選手入場し、觀衆は約二萬と稱せられた。來賓には齋藤總督を始め、李完用候、大塚鎮海要港司令官、生田内務局長、各道知事、其他官民有志五百餘名の參列あり、午後三時二十分竣工式を終り、引つづき開場式を挙げ、府尹の式辭、總督以下の祝辭があつて後齋藤總督の發聲で聖上皇后兩陛下竝東宮同妃兩殿下の萬歳を高唱し同三時四十分めでたく開場式を終つた」

この開場式の前には修祓の儀式が執り行われ、その後、上記のような開会の辞、式辞、工事報告、その他來賓の祝辞などが行われている⁴⁴⁾。

そして、この後に齊藤總督のテープ切りが行われ、開場式に続き、朝鮮神宮競技大会の開会式を兼ねて京城運動場の入場式が舉行された。このとき競技場において京城府立公立小學校、普通學校あわせて29校、1万人に近い兒童たちによる8種の連合体操が行われている⁴⁵⁾。

入場式ではおよそ1,200名の神宮競技大会出場者が入場し、生田体育協会長の挨拶、齊藤總督の祝辞、選手代表の宣誓が行われた。このとき齊藤は「朝鮮神宮新たに成り本日鎮座祭を行はるる佳節に際し、鮮内各地より運動選手を招き、神前に之が競技を爲さむとするは極めて會心に堪えざるなり。我國に於ては神前に技を競ふこと廣く行はれ以て士氣の發揚を圖れり、今諸子は茲に鎮座祭に當りて古來の慣例に依り競技の事に従はむとす、諸子は宜しく平素練磨せる所を十分に發揮し競技の眞精神を體し、以て其の壯快なる意氣を示さむことを望む」⁴⁶⁾と祝辞を述べ、この競技大会が日本の慣例との関わりから、いわゆる神前競技として行われることを祝していたのである。

それに次いで第一、第二高等女學校の生徒2,000名による行進遊戲が行われ、最後は、このときを機に京城連合青年團の閲団式も執り行われている。この青年團はそれまで日本人、朝鮮人の各々で構成されていた青年團をひとまとめにしたもので、両民族が団において結束し、内鮮融和が図られること目的としていた⁴⁷⁾。これは朝鮮人に

よる青年団の活動（政治運動、社会運動）に対する牽制であり、こうした鎮座祭、京城運動場の開場式などの記念式典を利用して行われたものであったと理解される。ともあれ、この閲団式を終え、この日のすべてのプログラムが終了したのである。

(3) 朝鮮神宮競技大会の開催

15日の開会式を終え、16日から18日の3日間にわたって第1回の朝鮮神宮競技大会が開催される。大会の開催に際して10月11日付の京城日報では次のように述べられている⁴⁸⁾。「朝鮮に於ける空前絶後の盛儀たる神宮の御鎮座祭が来る十五日執行されるに當つて、東宮殿下御結婚記念として永へに御慶事を壽くべき京城運動場も、最近漸く完成し東洋一と誇る甲子園グラウンドと肩を列べる程の宏大なるものとなり、朝鮮體育協會では神宮の御鎮座祭を奉祝すべく来る十六日より三日間運動場開きを兼ね盛大なる朝鮮神宮競技大會を舉行することになった。本競技大會は陸上競技、野球、庭球、籠球、排球を併せ、出場選手は廣く全鮮より選出し學生は勿論全鮮各地の青年団等普く内鮮一般の男女を網羅せる半島運動界未曾有の大規模のもので優勝旗の外總督、總監を始め多數優勝カップの寄贈もあり本大會に於ける優秀選手は近く舉行される明治神宮競技大會に朝鮮代表選手として派遣されることになつてゐる。(中略)斯くの如く全鮮を舉げて行はれるこの神宮競技大會に出場する選手總數は二千名の多數に上り半島運動界空前の盛觀を呈するであろう」

上記によって大会の概要を掴むことができよう。これによると、これまで述べてきた朝鮮神宮の鎮座祭を奉祝するという意味と京城運動場の開場を記念するという意味のふたつをこの大会が持ちえていたことを知らしめてくれる。また、この大会には朝鮮の各地から日本人、朝鮮人を問わず、競技において優秀な成績を修めた者あるいは優秀な成績を修めたチームが参加しており、更にこの大会において優秀な成績を修めた場合は、日本で開催される明治神宮競技大会に代表選手として参加することになっていたのである。したがって、こ

れら一連の繋がりををもって朝鮮神宮競技大会が創設されていることを鑑みると、こうした総合的なスポーツ大会が様々な社会的状況や背景を映し出しているという点で非常に重要であると思われる。

ところで、この神宮競技大会は16日の野球戦を皮切りに開始されている。野球の出場チームは7チームで、その参加している各チームのメンバーをみるとほとんどが日本人であるが、その後行われたバレーボールやバスケットボールのメンバーをみると朝鮮人選手も数多く参加していることが分かる⁴⁹⁾。そして競技の結果、野球や庭球に関しては日本人で構成されたチームが優勝を果たしており、バレーボールやバスケットボールなどは朝鮮人によって構成されているチームが優勝を果たしていた⁵⁰⁾。

こうして競技を終え、大会での優勝者には優勝旗やトロフィーの授与がなされているが、「今回の第一回朝鮮神宮競技大會における優勝者は永久に記念される意味において明治神宮競技大會のそれにならつて姓名を桐板に記入して朝鮮神宮に奉納せらるる筈である」⁵¹⁾とあるように、朝鮮神宮に優勝者の名前を記入した桐板が納められることにもなっていた。

また前述したように、この大会での優秀選手は明治神宮競技大会への参加を果たしている。参加する選手らは朝鮮體育協會の推薦によるものであったが、陸上競技においては、5千メートルの姜燦格、ローハードルの網干宗一、棒高跳びの山本麓、また庭球では町田・今田組、女子選手として須々木・古田組、田口・島谷組が明治神宮競技大会へ出場しており、殊に庭球の須々木・古田組は明治神宮競技大会において準決勝まで勝ち残るなどの活躍をみせ、大きな評価を受けていた⁵²⁾。

こうして第1回の記念すべき朝鮮神宮競技大会は盛況の下に幕を閉じたのだが、この大会創設の経緯から推すと、こうした祝祭的な空間が当時の植民地である朝鮮において出現したことの意義は大きいだろう。それは当該期における日本の植民地政策を象徴したスポーツ大会であったと理解することができる。

5. まとめ

以上、朝鮮神宮競技大会の創設について、その成立までを大会を取り巻く状況から考察してきた。これまで明らかにしたところをまとめると以下のようになる。

1. 朝鮮神宮競技大会が行われるためには、まずそれに見合った運動場の建設が必要であった。そのとき登場してきたのが京城運動場であり、この運動場建設はまた東宮御成婚の記念事業としても遂行されている。
2. この大会は朝鮮体育協会によって運営・管理がなされ、大会開催にあたり、競技細目及び出場資格の決定、また大会経費の管理、大会プログラムの作成などを行い、全面的にこの大会をバックアップしていた。
3. 一方、日本の国家神道の象徴である朝鮮神宮もこのとき創建されており、それを記念して鎮座祭が行われることになった。この鎮座祭は府をあげて盛大に行われている。
4. 竣工した京城運動場の開場式は朝鮮神宮の鎮座祭が挙行される1925（大正14）年の10月15日に時を同じくして行われ、朝鮮神宮競技大会の開会式も開場式直後に行われている。これらが同時に挙行されることで大会を含むそれぞれのイベントはその祝祭性を強めていた。
5. こうして朝鮮神宮競技大会は、朝鮮神宮の鎮座と京城運動場の開場を奉祝するという意味も担いつつ、前年日本で開催された明治神宮競技大会の影響も受けながら開催されたのである。この大会へは日本人、朝鮮人がともに参加しており、優秀な成績を修めた選手は朝鮮体育協会の推薦を受け明治神宮競技大会への参加が認められた。

朝鮮神宮競技大会はこの後も毎年開催され、1943（昭和18）年の第19回大会をもって姿を消すことになるが、その詳細は今後の研究課題として取り組んでいきたい。

注記及び引用参考文献

- 1) 1919（大正8）年の3・1独立運動の後に朝鮮総督となった斉藤実によって行われた政治で、その施政方針には「本期の當初に於いては先づ本府官制を改め、從來總督の任用は武官に限りたる制限を廢止して普通警察制度に改め、尚ほ官吏・教員等の制服帶劔を廢止する等、總督政治の重點を文化的開發に置くことを明らかにした。之が爲に時人は普通に文化政治と稱するに至つたが、統治の根本方針に於いては前期と何等異なる所なく、即ち併合の詔書を奉體し、益々一視同仁の大御心を擴充し、半島をして天業恢弘の樂土たらしむるにあるは勿論である」と語られている。（朝鮮総督府編：『朝鮮総督府施政三十年史』名著出版、1974年、p.134）
- 2) 朝鮮神宮競技大会は第1回大会以降、1943（昭和18）年の第19回大会まで毎年開催されているのに対し、明治神宮競技大会は内務省と文部省の確執から主管の変更や隔年で大会が開催される時期があるなど、朝鮮神宮競技大会に比べ大会の運営が必ずしもスムーズには運んでいなかった。つまり、それだけ朝鮮神宮競技大会が統制をとられながら開催されていたとも言える。
- 3) 第1回大会に関して『大韓體育會史』には「第一回大會にはわが選手たちの参加は全くなく」とされているが、事実とは異なり、第1回大会から朝鮮人選手の参加が認められる。（大韓體育會編：『大韓體育會史』ソウル、大韓體育會、1965年、p.203）
- 4) 李学来著：『韓國近代體育史研究』ソウル、知識産業社、1990年、p.187
- 5) 京城日報は日本語で書かれた新聞で、総督府の御用新聞としての役割を果たしたとされる。社則の一つ目には「京城日報の社員は忠君愛國の精神を發揮して朝鮮總督府施政の目的を貫徹するに励むること」とあり、その紙面上の性格をあらわしている。主な資料として京

- 城日報を用いるがこの点には留意しておきたい。
- 6) 朝鮮總督府編：「朝鮮」1925年11月号、ソウル、高麗書林、復刻版1987年、p.145
 - 7) 朝鮮總督府編：「朝鮮」1925年11月号、ソウル、高麗書林、復刻版1987年、p.146
 - 8) 京城日報 1925年5月30日付
 - 9) 京城日報 1925年5月30日付
 - 10) この土地買収において問題になっていたのは買収額に対する京城府と朝鮮貿易会社間の認識の相違であった。具体的に言うと貿易会社側は所有地2,000坪を坪15円と査定していたのに対し、府は坪10円と査定し、総額にすると約10,000円ほどの差額が出ていたのである。(京城日報 1925年2月13日付)
 - 11) 京城日報 1925年10月10日付
 - 12) 京城日報 1925年10月10日付
 - 13) 京城日報 1925年10月10日付
 - 14) 宮田保：朝鮮運動競技界の發達と現状、「文教の朝鮮」ソウル、朝鮮教育會、1927年4月、p.112
 - 15) 京城日報 1925年2月13日付
 - 16) 新東亜編集室編・鈴木博訳：『朝鮮近現代史年表』三一書房、1980年、p.131
 - 17) 京城日報 1925年3月19日付
因みに朝鮮体育協會が組織された当初は年額50円以上の会費を納めるものを会員と規定しており、会費を下げることで会員の増員を図ろうとしたことが理解される。
 - 18) 京城日報 1925年9月9日付
 - 19) 京城日報 1925年9月9日付
 - 20) 京城日報 1925年9月20日付
 - 21) 京城日報 1925年10月1日付
 - 22) 吉野作造著：『吉野作造選集9 朝鮮論付中国論三』岩波書店、1995年、p.210
 - 23) 村上重良著：『国家神道』岩波書店、1985年、p.223
 - 24) 明治政府によって定められた神社の格に関する制度のこと。神社の格を大きく官社と諸社に分類しており、官社には官幣の大中小社、
 - 国幣の大中小社があり、官幣社は神祇官が、国幣社は地方官が祭るものとされ、それぞれ神祇官の所管とされた。また、諸社には府社、県社、郷社が置かれたとされる。(坂本是丸、近代社格制度、『神道事典』弘文堂、1994年、p.121)
 - 25) 帝國地方行政学会編：「社寺 宗教」、『朝鮮法規輯覽(全)』帝國地方行政学会、1920年、p.1
 - 26) 京城日報 1925年6月28日付
 - 27) 岩下傳四郎著：『大陸神社大觀』大陸神社聯盟、1941年、p.52
 - 28) 岩下傳四郎著：『大陸神社大觀』大陸神社聯盟、1941年、p.53
 - 29) 小笠原省三著：『海外の神社』神道評論社、1933年、pp.186-187
 - 30) 朝鮮の始祖神の号とされる。この信仰は以下のように説明される。「檀君信仰は初め民間信仰であったが、高麗末には地方豪族や貴族にも信仰されるようになり、朝鮮王朝(李朝)の国号採用にも箕氏朝鮮とならんで檀君朝鮮の国号が有力とされた。(中略)19世紀末、民族意識の高揚につれ、檀君はふたたび朝鮮民族の祖神として信仰され、大倭教(檀君教)がおこり、現在なお韓国の有力な固有宗教となっている」(井上秀雄、檀君、『朝鮮を知る事典』平凡社、1986年、p.268)
 - 31) 中濃教篤著：『天皇制国家と植民地伝道』国書刊行会、1976年、p.285
 - 32) 明治神宮奉賛会編：『明治神宮外苑志』明治神宮奉賛会、1937年、pp.7-11
 - 33) 高津勝著：『日本近代スポーツ史の底流』創文企画、1994年、pp.53-54
 - 34) 内務省編：『第一回明治神宮競技大會報告書』内務省衛生局、1925年、p.1
 - 35) 内務省編：『第一回明治神宮競技大會報告書』内務省衛生局、1925年、p.4
 - 36) 京城日報 1925年9月27日付
 - 37) 京城日報 1925年10月7日付
 - 38) 京城日報 1925年9月30日付

-
- 39) 京城日報 1925年10月16日付
 - 40) 京城日報 1925年10月16日付
 - 41) 朝鮮總督府、朝鮮神宮鎮座祭の状況、「朝鮮」
1925年11月号、ソウル、高麗書林、復刻版
1987年、p.123
 - 42) 京城日報 1925年10月15日付
 - 43) 朝鮮總督府編：「朝鮮」1925年11月号、ソウル、高麗書林、復刻版 1987年、p.146
 - 44) 大阪朝日新聞朝鮮朝日 1925年10月16日付
 - 45) 大阪朝日新聞朝鮮朝日 1925年10月16日付
 - 46) 京城日報 1925年10月16日付
 - 47) 京城日報 1925年9月15日付
 - 48) 京城日報 1925年10月11日付
 - 49) 京城日報 1925年10月11日付
 - 50) 大阪朝日新聞朝鮮朝日 1925年10月21日付
 - 51) 大阪朝日新聞朝鮮朝日 1925年10月9日付
 - 52) 京城日報 1925年12月23日付